

アーネスト・サトウの上海滞在に関する 資料的考察

—Ernest Satow's Autograph Diaryを中心にして—

Ernest Satow's Stay in Shanghai — A Study Based
on a Transcript of Ernest Satow's Autograph Diary

宮 澤 眞 一
Shin-ichi Miyazawa

はじめに

第一章 『一英国外交官が見た幕末維新』との関わり

第二章 幕末維新史との関わり

第三章 Ernest Satow's Autograph Diary:

Shanghai, November 4, 1861 – March 25, 1862.

結び

注

はじめに

戦後日本の文学研究において、二人の仏文系詩人、天沢退二郎と入沢康夫の宮澤賢治研究は、詩人の創作過程に迫る新しい構えの方法論を展開してみせてくれたことで、次の世代に属する筆者などには、新鮮で、大いに引きつけるものを持っていた。

『宮澤賢治の彼方へ』¹⁾での天沢は、ファンタジー童話「風の又三郎」のなかで、ことに嵐の場面と又三郎の登場を分析しながら、興味深く、説得力をもって、賢治における日常性の心理から非日常的な創造心理への移行を解明している。クリエートするという創作時の心理に対する並々ならぬ関心は、仏文研究者のニュー・クリティシズムというよりも、自ら作詩にたずさわってきた経緯から生まれたものであろう。

そう理解しなければ、つづいて両者の協力により編集された膨大な『校本・宮澤賢治全集』²⁾の意図や熱意がわからなくなる。最終校正の完了した作家原稿を活字化して定本にするという通常的全集刊行と全くちがって、ここでは、創作途中の詩人の筆の動きを全て再現しようとするかのように、自筆原稿の活字化に苦心しているのである。

対象となるテキストが、作品本文であるか、自筆原稿であるか、その違いはあるにしても、天沢退二郎の作品研究、入沢康夫との共同作業による原稿研究、これら二者は、テキスト批評の斬新な一面を持っている。身近な日本の文学畑での展開であっただけに、影響力が大きく、その後の文学研究に多様な示唆を与えたと思われる。

インパクトを受けた一人として、筆者もまた、両者の労作に感謝している。文学研究における自筆文書の研究が、単に緻密な文献学的領域に閉じ込められずに、創作心理を解明するための主要な研究手段になることを教えられたからである。ところで、外国文学の研究領域におけるテキスト批評は、志として存在しえても、実際の展開となれば容易なことでない。遠い時代に書かれたものであるなら、日本の古文書と同じで、解読作業に手間がかかるであろう。筆者の場合も面倒なテキスト批評を最初から志したわけではなく、作家研究の過程のなかで、やむを得ず、深入りすることになっただけである。

研究テーマは、英国世紀末の文学者アーサー・シモンズ (Arthur Symons, 1865-1945) である。自筆の個人文書 (autograph personal papers) の整理は、手間のかかる基礎研究である。できれば英国や米国などに在住する専門研究者に期待したいところであるが、シモンズ研究の場合には、こちらが期待するほどに進展していないという実情にあった³⁾。「やむを得ず」と言ったのは、そういう意味からであり、ここ10数年のあいだ、シモンズ自筆の原稿と書簡の整理に、途方もなく多くの時間が必要になってしまった。

手書きの原稿と自筆書簡は、コレクターの間で稀少価値があるので、表には出ずに隠れる傾向にある。そこでまず所在を探索する調査から始めなければならない。そのあとは、マイクロ・フィルムなりのコピーに複写してもらい、判読作業に入り、タイプで打って読み方を確認する。できれば更に、タイプした判読文書を、現物の自筆書簡なり生原稿と比較しながら訂正・再確認して正確を期す。海外の図書館や個人所蔵者の自宅まで行って、現物の自筆文書を前にして座る、ということになる。やっかいではあるが、感動的な最終段階に違いない。

本稿であつかうアーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow: 1843-1929) の日記研究は、シモンズの伝記研究で味わってきた自筆文書の調査体験から派生したものである。幕末維

新史研究では全くの門外漢にすぎないのであるが、かつてサトウの回想録『一英国外交官の見た幕末維新』(*A Diplomat in Japan*)⁴⁾を手にしてから、同書のもとになったと言われる日記の自筆ノートを一度読んでみたいと思っていた。それでロンドンに滞在していた1986年の間に、余暇をみつけては、チャンサリー・レインの英国公文書館へ通った。ロンドン滞在中に親しくさせていただいた一老英文学者が、専門研究からのこうした逸脱を眺めておられていたので、ある日、これは研究余録だな、と笑われたことがあった。

作品原稿、自筆書簡、自筆日記、これらはともに、時間と空間のなかでの一回性の記録という点で共通した面白さがあった。資料の持つこの一回性から、臨場感がおのずと生まれてくるように思われる。

作品の生原稿を目の前にして読む時の臨場感。それは、シモンズの創作心理を追体験しているような錯覚と言える。自筆書簡を目の前に開けば、人間関係の心理的な機微を、今シモンズとともに、手紙に綴っているような、そんな気持ちになってくる。サトウ日記のときには、幕末維新の歴史舞台を、あの日この日に、サトウとともに目撃しているような迫真力があって、夢中になれた。いわば我を忘れて、作家との一体感を味わえるというのが魅力の一つで、それで、ついつい凝ってしまい、深入りすることになる。

最初、サトウ日記のノート約六冊分を通読して、薩摩や西郷隆盛に関連する箇所のみをエンピツで筆写した。そのあと、やはり日記のはじめから打ち込んで整理してみたくなり、ワープロを持ち込んでタイプに起こすことにした。第二章のテキストは、サトウが上海滞在中に記したものであり、本稿では「上海日記」と仮に呼ぶことにする。サトウ日記では最初の一冊目ノートの冒頭部分にあたる。

なお、横浜開港資料館の地下閲覧室に行くと、サトウ日記のマイクロ・フィルムから印刷・製本した複製版を利用できるので便利である⁵⁾。

本稿の目的は二つある。一つには、「上海日記」のサトウ自筆文を解読して作製した英文テキストを発表することである。その際、できるかぎり詳しく正確な注をつけたいのであるが、マイナーな若い英国商人が余りに大勢登場するので、分からない場合も少なくない。その場合には、「詳細不明」と注記する。

もう一つの目的は、これまで日本であまり知られていないサトウの上海滞在について評価を加えてみることにあり、先ず最初に、サトウの回想録『一英国外交官の見た幕末維新』との関わりの中で評価を試み、つづいて、幕末維新史との関係で再評価をしてみたい。その際に、文学あるいは歴史研究の資料としての日記の性格を指摘して、リング・ダラス

事件を例にとりながら、トリビアリズムの意義についても触れておきたい。

第一章 『一英国外交官が見た幕末維新』との関わり

日本通の英国外交官としてのアーネスト・サトウの名前は、多くの日本人読者に親しみ深いものであるようだ。幕末維新から明治初期にかけて、来日、帰国、再来日を繰り返す間に、日本滞在が約25年におよぶ長い年月となった。英国公使館に勤務する通訳見習い・通訳官・書記官・公使の職にあったから、幕末動乱期の模様をつぶさに目撃できたり、明治藩閥政府の情報を得るうえで特異な立場にいた。日々の大事な出来事を、途切れがちではあったにせよ、日記に書きつづけている。原文の『サトウ日記』は、未刊の自筆ノートのまま、陽の目を浴びずにいたが、その概略内容については、主として二つの刊行物を通して今日の日本で広く知られるようになったと思われる。

まず、回想録(*A Diplomat in Japan*)が日本語に翻訳されて、文庫本の形で刊行されている。同書は最初の日本滞在期間(文久二年・1862年8月から明治二年・1869年2月)の6年半を扱っている。序文で述べているように、自筆の日記を主要な資料にして書いたものであるから、同書の後半のみならず全体的に、“a transcript of my journals”¹⁾と言えそうな箇所が多い。

また、「サトウ日記抄」と副題のある『遠い崖』が、全国的な新聞紙上で連載されてきた。昭和51年に開始されて以来、一時中断の時期があったとは言え、現在まで継続されている。著者の萩原延寿氏が、ロンドンの英国公文書館に日参され、サトウ自筆日記の解読研究に20年を費やして完成した労作である²⁾。

上記二つの刊行が、文庫本と新聞連載という大衆メディアの形を取っているのだから、アーネスト・サトウの自筆日記の資料的な意義は、広範な日本読者に理解されていると思われる。同時にアーネスト・サトウの人間像——サトウの日本的なイメージ——が、上記の刊行物によって、私たちの心中に形成されてきているとも言える。

ところで、英文のサトウ関係資料が、これまでに外国人のサトウ研究者によって、いくつか編集・刊行されてきた。その一つが、オックスフォード版の『一英国外交官が見た幕末維新』であり、編者は、ゴードン・ダニエルズである³⁾。ダニエルズは序文において、興味深い指摘をしているので、ここで主要なものを挙げて検討しておきたい。

同書執筆にあたってのサトウの執筆動機は複雑であり、巧なり名を遂げた英国外交官が

その立場から書いているのであるから、批判的に読む必要がある、と先ず指摘している。一つの例として幕府の扱い方をあげている。既に明治維新は成功し、近代日本が進行している執筆当時（駐バンコク英国総領事の時期：1885-7年）、倒幕派を正当化する文章を書くことで自己の歴史的予見能力を証明しようとする動機が働いている、とダニエルズは批評するのである。

サトウの回想録を読めば、たしかにサトウがいかに新しい勢力の未来性を予見できて、薩摩藩などの新勢力のために尽力する姿が印象に残る。ダニエルズの言うように、これには後日の脚色が入っているとすれば、文学研究の一つのテーマがここにある。自叙伝の虚構性、神話化という古くて新しいテーマである。

編者のダニエルズは、ハリー・パークスに関する博士論文をオックスフォード大学で書いた東洋学者である⁴⁾。動乱期に日本へ派遣されたパークスをはじめとする各国の公使にしても、日本の行く末を予見し、自分の予見に自信をもつなどということは大変に困難であったはずである——、外交政策の決定権のない下級外交官のサトウとなれば、勝手な言動がまだ許されるが、パークスなどはそういうわけにいかず、当然サトウと意見が異なってくる、とも述べている。パークス研究家の評価であるだけに説得力がある一方、ややサトウには不親切な批判のようにも聞こえる。例えば薩摩藩への英国政府の傾斜、その動きの中でのサトウの役割、という点にしても、サトウの活動を十分に評価するためには、まだ資料が足りないように思われるからである。とりわけ長崎の英国商人 T.B. グラバーや横浜のジャーディン・マセソン商会を代表例とする、英国商人の利益追求の実態が明らかにならないと、サトウの言動や歴史予見性にしても、正當に評価しにくいのではないかとだけ述べておきたい。

さらにダニエルズによれば、ロンドン大学を卒業したばかりの青年であるのだから、若気の至りと呼べそうな挙動が数々あったはずであるのに、サトウは、回想録のなかでその点を隠そうとしているという。

Satow describes his relations with Japanese women in rather sketchy and discreet phraseology, but his omission of other youthful emotions is of more historical interest.⁵⁾

ダニエルズのこうした批判的な見解を知ると、当然のことながら、サトウ日記と回想録とでは、記述のうえで乖離があるのではないか、という素朴な疑問が生まれるであろう。ダニエルズはこれに答えるかのように、サトウが、回想録の執筆時点で自筆日記に多少の手を加えているし、両者の間に「ズレ」(“divergences”)⁶⁾がないわけでない、と述べて

いる。しかし、回想録を復刻するか、日記を出版するか、となれば、日記出版のための労をわざわざ取ることの利益の差は、「微々たること」(“litte more than marginal”)⁷⁾である、とも観測を記している。

以上に紹介したダニエルズの幾つかの見解は、矛盾しあうものを含んでいる。自筆日記を解読して活字化する日記出版と、回想録の復刻版出版とでは、性格がまったく異なる作業であるのだから、本来、比較することができない。ダニエルズが「微々たること」とした「ズレ」のなかにこそ、回想録で隠したと批判するサトウの人間的な側面が、あるいは、潜んでいるかも知れないのである。

サトウがバンコク駐在の英国総領事の要職に任命されて、1884年1月24日にバンコクへ赴任するにあたって書いた手紙が、バーナード・M・アレン著『アーネスト・サトウ卿公伝』に紹介されている⁸⁾。日本滞在についての回想録を書き始めるために、日記の整理をそろそろ開始する時期にあたっているが、みずから若い時代の「無責任」に触れていて興味深い:

My student days at last are at an end.
My line is now laid down pretty clearly and I can no longer consult my own
tastes and fancies.
No one has a right to be so happy as I used to be, when I had no
responsibilities and was still a boy in everything but years.

責任ある立場にない若いサトウが過ごした幸福な日々とは、いったいどのようなものであったのだろうか。回想録のなかから探ることも不可能でないのであるが、なんと言っても、横浜滞在に先立って過ごした最初の訪問地・上海での私生活が、最初のがかりになるはずである。そのころはまだ18歳の日本語通訳見習生であった。

サトウの上海到着は、1861年1月16日であり、北京に向けて出発するのは、同年3月25日である。その間2ヶ月あまり、ほぼ毎日日記を書いている。この几帳面さは、上海とそれにつづく北京生活の特徴である。来日後の日記は、これほどの几帳面さを守れていない。この点は、単に生活環境の上の変化と見るよりも、サトウの性格を理解するための手掛かりとして重要であると思われる。

上海時代のサトウは、いまだ父親の影響を抜け出せないでいる未熟な青年である。萩原延寿氏の連載40回分には、「鞭でしつける厳しい父」という見出しがついている⁹⁾。非国教会系の熱心な信者である父親は¹⁰⁾ ヴィクトリア朝後期の同じような家庭環境に育った文豪エドモンド・ゴス卿の自叙伝『父と子』¹¹⁾ を思い出させる。ゴスが父親の権威や期待からの脱出をはかり、ロンドンへ家出したように、サトウの東洋行きには、父親からの

開放という隠された動機があったように感じられる。

几帳面さが崩れていく。崩れていく几帳面さを何度となく回復しようと努める。こうしたサトウ日記の書き進め方を見ていくと、父的なものとの苦しい内心の葛藤が読み取れるように思われるのである。

『遠い崖——サトウ日記抄』では、三回分の連載で上海滞在が扱われている。50回「意外な中国滞在の指示」、51回「上海滞在が二カ月余に」、52回「太平天国の反乱を見る」の三回分である。¹²⁾ 生活模様の輪郭がまとめられているので、貴重な資料である。しかし、サトウの性格を知る上で有益と思われる「責任のない幸福な日々」の始まり、あるいは、内的葛藤という心理的な側面の芽生えには、連載の主要な流れから言って、あまり詳しく触れられていないのは残念である。

第二章 幕末維新史との関わり

日記に則して辿ってみると¹³⁾、サトウは、萩原延寿氏が指摘するように、漢字の独学に熱心ではあり、太平天国の乱など中国情勢や文化に関心を深めているが、やはり若者らしく比較的自由に、初めての異国生活を楽しんでいるように見える。父親の膝元で受けた厳格なルーター派の教育の影が、少しずつ薄らいでいく。いくつかの例があるので、二、三、検討してみよう。

異国の租界地では、退屈しのぎに酒を飲む。謹厳な18歳のサトウの場合はどうであろうか。1月19日の夜、友人が浴びるほどの酒を飲んだあとで、寝酒(“nightcap”)を勧められても、サトウは断っている。それが2月3日には、生まれてはじめて、水割りのコップを手にするようになる。

酒が入る席では、詰まらない内容の話が、酒の肴に発展する。3月8日のサトウは、風邪で頭痛がするのをおして宣教師宅まで出掛け、中国語辞典の貴重な古書を分けてもらっているのに、夕方は、不動産業者のバーネス・ダラスの家の夕食会に招かれて、酒の席に出ている。バーネス・ダラスとはリンゼイ商会のビリヤード・ルームと一緒に玉突きをする仲間である。ダラス宅夕食会でのサトウは、もっぱら聞く役にまわったであろうが、酔っぱらう客が一人、二人いるもので、「言うまでもなく卑猥な会話になった」(“Of course the conversation became smutty”)。

一体ダラスはどういう人物であったのか、はっきりしたことは分からないが、悪名高い

冒険商人の典型であったように見えなくはない。1850年から上海で発行されている英字新聞 (*North China Herald*: 字林西報) には、ダラスに関係する記事や広告がたくさん掲載されている。おそらく30歳前後の若さであったと思われるけれども、主に公共租界にすむ外国人を相手にして手広く自営の仕事をしていた形跡がある。

バーネス・ダラスは、ある意味で何でも屋さんである。租界地の借地斡旋をする不動産業にはじまり、荷揚げした酒類など各種の英国商品を競りにかけてみたり、さらには上海競馬場の土地を一部購入して運営に加わってもいる。英国領事館に委託されて馬の斡旋までしている。クリークの橋の通行税を集める仕事もあった。上海の商業会議所の事務を取りしきるなど、若いけれども上海の顔であり、おそらく上海住民の英国人でダラスを知らない人はいない、と思われるほどの勢いである。

中国各地の租界地や日本の居留地には、ダラスのような自営商人が大勢すんでいたらしい。利益追求のために無茶なことをするので、各地の領事が手を焼いた人々であろう。ハロルド・S・ウィリアムズ氏の一連の『居留地物語』には、彼らの生活模様が、赤裸々に、同時にほのぼのとした笑いを伴って、巧みに描かれている。オルコックのような上級外交官からすれば、彼らを「地上の滓」(“the scum of the earth”)²⁾ と呼ばざるをえない破廉恥な行状があったのであろう。

こうした冒険商人や自営業者の中であって、サトウは、持ち前の几帳面さから崩れていく自分の姿を心配する。日曜日にスケートをしたことに悩み、良心の呵責に襲われている。2月2日のことである。すでに見たように翌日には、生まれて初めてのウィスキーを口にする。どうやら、この1862年の1月末から2月初め頃、生活に対する姿勢が、変化しているように思われる。同じこのころである、ビリヤード・ルームに通いつめる一時期がおとずれる。

「1月27日。月曜日。夕方、ヴェイチと連れ立って雪の中をリンゼイ商会のミッチーの所へ行った。雑誌を貸してもらうためだ。彼は我々にビリヤードをしに来ませんか、と誘ってくれた。」

2月5日、水曜日。実際にリンゼイ商会のビリヤード・ルームに行ってみる。

「そのあとでヴェイチと一緒に、ミッチーの所でビリヤードをした。ダラス、ターナー、コードン、キング、スミスに会った。そこで夕食を食べ、再びビリヤードをして、帰宅したのは12時。」

さらに、2月10日、15日、28日にビリヤード遊びをしているが、3月4、5、6日の三

日間は、深刻な表情の遊びになってきている。

3月4日、ライスを相手にして負ける。翌日の5日、リンゼイ商会のビリヤード・ルームで、バーネス・ダラス、スミスほか二人と遊んで負け、そのあとでスミスが、ボーリングに似たピンを倒す新型の賭博ゲームを紹介し、負ける。サトウは賭金を、「払えないし、借りて払うつもりもないし、どうなることやら。帰宅して12時半に寝た」と自暴自棄的な気分で日記に記している。

外交官の卵であると思っていたサトウが、商社のビリヤード・ルームに通いつめてみたり、冒険商人など、海外の租界地にどこからか集まってくる人々の群れのなかで生活している。仲間はみな無名の雑多な職業の若者ばかりである。この姿はどうみても、『一英国外交官が見た幕末維新』の読者にとって、驚き以外の何物でもない³⁾。後年になって名をなす人物ではあっても、若い日には、明日がどうなるか分からないマイナーな群像の一人に過ぎないのであろうか。

日記という個人文書は、雑多な詰まらない日常茶飯事を子細に記録する、という側面を性格的に持ちあわせている。上の引用文に見られるような、マイナーな人物や事象、些細な事柄を記録したもののなかにこそ、案外、貴重なヒントや情報が見い出せることがある。「上海日記」は、少なくとも若いサトウの生活を生々しく描き出していて、宗教的家長制の影響から自由になろうとする内的葛藤を伝えている。サトウの人間的成長を知るうえで貴重な伝記資料であると言える。

また、マイナーな群像についての記録は、サトウの回想録や伝記にあまり使われていないが、等閑視しがちなトリビアルな記録のなかに、思いがけない歴史資料の発見があるかも知れず、日記のトリビアリズムにも、それなりの意義があることを教えているように思われる。

バーネス・ダラスとその周辺の人々が、一つの具体的な例になると思われるので、ここで、幕末の事件と明治に入ってから事件、これら二つにつき「上海日記」に登場するバーネス・ダラスの周辺がどのようにかかわっているか、その関連性を見ておきたい。

一つには生麦事件である。このころ、生麦事件の犠牲者チャールス・レノックス・リチャードソンもまだ上海に在住していたはずである。29歳になる無名の英国商人であり、ビリヤード遊びのメンバーであったとしても不自然ではない。バーネス・ダラスはリチャードソンの親友であることが、英国公文書館の別の資料で分かるからである⁴⁾。バーネス・ダラスの人柄や生活を知ることは、そのまま、リチャードソンの交遊関係や上海の生活環

境を理解しやすくなるので、その意味で、サトウの「上海日記」は、生麦事件研究の重要な資料であると言える。

生麦事件が幕末におきた血なまぐさい攘夷の最大の事件であるとすれば、明治維新に、こんどは時代遅れの尊皇攘夷ともいうべき切傷事件がおきている。明治3年(1870年)11月23日、東京神田・鍋町(現在の須田町)で、二人の外国人が、憂国の士に切られて重傷をおった。被害者の二人の外国人の名前をとって、リング・ダラス事件と呼んだり、事件発生地地名から鍋町事件とも言われている。リングもダラスも当時は、大学南校の語学教師であり、明治新政府は、パークス英国公使の抗議を待つまでもなく、封建体制の残滓をみるような事件として、犯人逮捕と厳罰の処置に出ている。犯人は、加藤龍吉(杵築藩士)、黒川友次郎(関宿藩士)、肥後壮七(薩摩藩士)の三人であった。

明治4年3月27日に、加藤龍吉と肥後壮七は絞首に処され、黒川友次郎は10年の流刑になった⁵⁾。文明開化をいそぐ当時の日本人が多い中で、他方には、尊皇攘夷の思想を捨て切れない志士たちがたくさんいた。加藤龍吉が事件の取調べで動機を語り、「皇国の婦人を夷狄が引っ張って行くのが不都合だと思ったから」と述べた言葉は、高橋是清自伝にも伝えられていて、当時、気概のある人として深い印象を与えた⁶⁾。リングとダラスは、二人の間に日本人の妾を挟んで夕方の散歩をしていたところに、加藤龍吉らが切りかかっている。

三人の志士の反感を買うはめになった二人の外国人の振る舞いは、すでに見てきた上海のバーネス・ダラスの周辺の人々であれば、起こりそうな行為であろう。被害者のダラスは、バーネス・ダラスの身近な親族であるらしく、「上海日記」にも登場している。3月8日に、サトウはリンゼイ商会で夕食に招かれているが、ほかの客の中に、バーネス・ダラス(“B. Dallas”)がいる上に、食後のビリヤードには、C.H.ダラスが加わっている。リング・ダラス事件のチャールス・ヘンリー・ダラス(Charles Henry Dallas)にはほかならない。

事件後のチャールス・ヘンリー・ダラスは、米沢に行き、明治4年10月から同8年2月まで、米沢中学の教壇にたった。東北では、「礼儀正しい典型的な英国紳士で、生徒からも米沢の住民からも親しまれ、敬愛の的になった」という⁷⁾。米沢時代の品行方正なダラスは、若き日の上海でビリヤード・ルームを溜まり場にしていたのと、随分違った印象を町の人々に与えたい。さらには、山形大学の松野良寅氏が収録された珍しいダラス関係資料によれば、英語発音入門書まで書いている(英人ダラス著・吉尾和一訳『英音論』

明治五年尚古堂)。そのほかに米沢方言や地域研究の論文を発表する地方学者 C.H. ダラスに変貌したかのようにみえるが、松野良寅氏の語る「なんとなく『徒者ではない』という印象」⁹⁾が、やはり拭い去られるような人物ではなかったと思われる。

死刑に処せられた犯人たちの遺族、たとえば加藤龍吉の場合には、割り切れない気持ちがずっと続いたであろう。他人の殺傷は、いつの時代でも許される行為でないが、生麦事件では、犯人逮捕と処刑は曖昧のうちに過ぎた。尊皇攘夷の意味は時代とともに大きく変わる。杵築市在住の遺族、加藤柁氏の熱心な調査によって、龍吉の足取りや思想の形成が少しずつ分かりはじめてきている⁹⁾。

「復古記の右の記録により、脱藩後の竜吉の行動がかなりはっきりとわかる。もし外人切傷事件だけが伝わってきたならば、志士としての面は少しも現れず、暴力団の一員か、単なる殺し屋ぐらいにしか評価されなかったのではあるまいか。竜吉の母サキは、明治二十四年まで存命で、青少年時代の彼をよく知っていたはずであるが、国事犯で処刑された息子について、多くのことを語るのを好まなかった。」¹⁰⁾

バーネス・ダラスの周辺を中心にして、二つの幕末・維新の事件との関わりを見てきたのであるが、これらの関連性は一例に過ぎず、雑多なトリビアルな事項の保管庫である日記の性格からして、サトウの「上海日記」分だけでも、様々な新しい情報やヒントを提供してくれるであろう。

第三章 Ernest Satow Diary: Shanghai,
November 4, 1861 – March 25, 1862

[Public Record Office, Kew, London: Group PRO, Class 30/33, Piece 15/1, ff.
1-43]

J o u r n a l

1861-62

[1861]¹⁾

Nov. 4. Left Southampton, Monday. 3. p.m.²⁾

Nov. 10. Sunday, got into Gibraltar Harbour at midnight.

Nov. 11. Monday. left Gibraltar at 8. am.

Nov. 15. Friday. arrived in Valetta Harbour at 10. am. left at 4. p.m.

Nov. 19. Tuesday. anchored in Alexandria Harbour at 8.30 a.m.

arrived at Cairo 4. p.m.

Nov. 20. ~~Tuesday~~³⁾ Wed. left Cairo at 9. am. arrived in Suez 2. p.m.

embarked at 4 p.m. weighed anchor 9. p.m.

Nov. 26. Tuesday. arrived at Aden 10. p.m.

Nov. 27. Wednesday. left Aden at 6. p.m.

Dec. 7. Saturday. anchored in Galle Harbour at 9. am. left at 4. p.m.

Dec. 14. Saturday. arrived at Penang 11. p.m.

Dec. 15. Sunday. left Penang at 9. am.

Dec. 17. Tuesday. anchored in New Harbour Singapore at 8. am.

Dec. 18. Wednesday. left at 8 • 30 a.m.

Dec. 30. Monday. anchored opposite Manila.

1862

January 4th. Saturday. ~~5~~4 p.m.

Jan. 8. Wednesday. anchored at Hong Kong, at 10. am.

Jan. 10. Friday. left at 3. p.m.

Jan. 16. Thursday.

Arrived in the anchorage at Shanghai at 11. am. I immediately took a shoreboat and, leaving my baggage in the ship, presented my letter of introduction to Lindsay & Co.⁴⁾ Not received very cordially, but nevertheless was offered a bed, which I accepted. I then called on the Consul,⁵⁾ who was out, but the head assistant, Jones,⁶⁾ informed me to my great surprise that I am not to go to Japan at present, but that Mr. Alcock,⁷⁾ seeing of what importance the Chinese language is to a Japanese scholar, has given orders for my detention here till the ice breaks up in the N.⁸⁾ & then for my proceeding to Peking, where I am to stay a year and a half, in order to form an acquaintance with the Chinese tongue. Was introduced to a Middleton⁹⁾ of the Consulate, Markham¹⁰⁾ the Vice Consul & Dr. Winchester.¹¹⁾ Had tiffin with Jones, & was introduced to Mrs. Jones, who is just like Fanny Reynolds¹²⁾, and to Jamieson¹³⁾, the other Japanese student interpreter, who has been sent back from Japan for the same purpose as I am detained for. After tiffin saw the Consul, Medhurst, who advised me to go to Astor House Hotel¹⁴⁾ in the American settlement. Jones accompanied me, & made an agreement for board & lodging at \$90 per. month of which I am to pay \$40 for board. at present have a bed in my sitting room, as the house is rather full. Returned to Lindsay's & told the head what were my plans, got my circular notes cashed at the Bank, and came back to Astor House to unpack. Dined at Markham's with Broster,¹⁵⁾ of the Imperieuse¹⁶⁾, Sturt¹⁷⁾ of the Marines, Green¹⁸⁾ & Middleton. After dinner an alarm was given of the approach of the Rebels, turned out & found all the people in a great state of excitement; marines & fieldpiece on the bridge; went for my pistol & stick, & waited on bridge; then returned for purse, went to Markham's, & came home to bed at 10.30; slept well, though disturbed now & then.

Friday. Jan. 17.

Walked for two hours in Shanghai & visited some curiosity shops; tiffin at

Jones; saw Ying,¹⁹⁾ Jamieson's teacher, but could not come to any arrangement. dined there; came home at 9 • 30 to bed.

Sat. Jan. 18.

Stopped indoors all day the morning arranging my goods & challets.²⁰⁾ At tiffin heard that the rebels are only 1 ~~8~~ miles off; went to the Consulate & found the people there quite free from excitement. Took a guide to the Mission house, which is at present a scene of great disorder, a new chapel being in course of erection; saw Mrs Muirhead and talked with her till the Dr.²¹⁾ came; bought A [*sic*] grammar fr. him & dialogues wch. I am to get on Monday; he is also going to try for a Dictionary for me. After leaving their house I wandered about in the settlement trying to get a box for gloves &c; visited Cheong Fat²²⁾ a Canton man, & another who paints pictures of ships &c; could not get one to my mind. I directly returned. I began to study the grammar, but found it rather puzzling. After dinner introduced to a Mr. Sitford,²³⁾ formerly a shipmate of Bird's.²⁴⁾ Began Locke's "Essays on the Understanding". I noticed today that the Chinamen never [—]²⁵⁾ shake hands, but always bow; also no Chinaman of respectability walks; one I saw riding on a pony, with a blue umbrella on a long pole carried before him, and several men following; some nob, I suppose. Last night there was a severe frost.

Jan. 19. Sunday.

After breakfast read; went to Church at eleven; church would hold 500 people; lofty ceiling of wood; walls of plaster, slate colour & painted in blocks, pillars wch. support the ceiling of same colour; nice organ²⁶⁾ & pretty good singing; rather surprised that they had no communion service. After dinner took a walk with Bird & Sitford to the ditch which is being dug between the Soochow & Yang-King-Pang creeks. Multitudes of Chinamen at work, who used a sort of 4 prongrake, like a pitchfork bent at right angles to the handle; they carried the earth away in baskets to form a breastwork. Also saw the French battery, where 3 six pounders are to be mounted. Went up onto the

city wall, wch. is pierced by thousands of embrasures, while not a single gun was to be seen. From the point of view the city looked very large, and near the walls the houses are much dispersed. The walls are 30 ft high & 12 feet thick at the bottom; the parapet is only about 2 ft thick. The part we saw is held by our [—].²⁷⁾ After returning home played chess with Bird; was introduced to a Mr. Stevenson, manager of lighterage business, after dinner. Sitford stood 2 bottles of champagne, & 2 glasses of that, with a go of hot whiskey & water, seemed to be quite enough for him; would not take any 'night cap' as I have no wish to show off that way.

Jan. 20. Monday.

Called on Dr. Sibbald²⁸⁾ with letters of introduction, hoping that he might be inclined to offer me a room with his house, wch. he did not, but asked me to dine, c[alled] him today. (Jan. 21)[sic]. Went & bought Hoin Chinghu & a glove box; after tiffin called at the consulate & on Jamieson; then walked into the city for writing materials & called on Rev. W. Muirhead, who was not at home. Came home & practised Chinese writing. After dinner played whist with Bird & Sitford.

Jan. 21. Tuesday.

Went with Bird to an auction, in order to buy books; could not get what I wanted as they were sold in one lot; saw Dr. Sibbald there. Carried my boxes over to the Consulate for safety. Heard that on Sunday the French at Woo Sung had killed about 130 of the rebels; the Chinese Imperialists cut off 2 heads & a lot of ears, & paraded them through the settlement with great exultation. Was ordered to go & write at the Consulate today for 2 hrs, & found I cld not get off. Learned fr. Jamieson that Ying came of course to me for a fortnight. Took Broster with me to Muirheads; I walked up alone, leaving him below in the verandah. He got tired of waiting & came upstairs, peeping into the schoolroom, where Mrs M. was praying with a lot of Chinese women. After he had been upstairs a little time he began to get awfully funky, & wanted to go down again. I proposed that he should tumble over the

balcony, but that did not seem to suit him. Directly Mrs. M. came up, he was introduced, & immediately rushed away. Bought some Chinese exercises. Mrs. M. offered to let the old fellow give me some lessons, but the old fellow did not seem to see it. Dined with Dr. Sibbald, met Moncrieff,²⁹⁾ Lay & his nephew³⁰⁾, a Canadian, rather a fool. Played whist; got home at 12. Lay knows a teacher, whom I can have if I don't wait for Ying.

Jan. 22. Wednesday.

Called on F. R. Gamwell³¹⁾ & Siemsson & Co.,³²⁾ but neither offered me beds. Called on Lay for his teacher's name; worked all the rest of the day at the Consulate, tiffin & dinner with Jones.

Jan. 23. Thursday.

Finished letters home; asked the old lady to send me a lot of things & gave her a list of things I am going to send her. Wrote to the postmaster at Hong Kong to stop letters from going to Japan. Dined with Middleton & Green; awfully wet night. Began talking about the service & got quite disgusted with it; I dare say it is not bad as it seems. The climate is the only thing I care about, tho' pay is small. Having an attack of diarrhoea, put on a cholera belt, which is abt 12 inches, too large round the waist. Saw Lenny³³⁾ & Dr. Winchester at the Consulate.

Jan. 24. Friday.

Stayed at home all day & worked at Chinese. took a walk on the Bund in the evening; horrid cold. After dinner went to Veitch's room; who showed me a lot of Japanese books, pictures &c. Nice chap; nurseryman in Chelsea.

Jan. 25. Saturday.

Stayed at home & worked at Chinese 5 hrs. Went over to see Jamieson. Read Locke.

Jan. 26.

Hard frost; ice in my water this morning. Went to Church & returned after tiffin was very nearly over. Saw Sibbald's nephew, who had on a shoe, ring, bad hat; snowing so that I can't go out; what a horrid bore! Lyemoon arrived

with a portion of mails.

Jan. 27. Mon.

deep fall of snow in the night. Codiz arrived with the rest of mails, & passengers, among whom was Macquire. Bird arrived from Ningpo in the Shandon. Race over to the Consulate & found that there were no letters for me. In the evening went with Veitch [—],³⁵⁾ thro' the snow to Michie's³⁶⁾ (Lindsay & Co.) who lent us papers, asked us to come & play billiards & promised to mount me when the snow breaks up. Saw Dr. Dixon³⁷⁾ a traveller, & a Gordon,³⁸⁾ of Lindsay & Co.'s house. Got home at 12 & sat up to read the news. Cadetships established at Hong Kong for Chinese interpreterships. Salary £200 a year, books, quarters & teachers found. To be appointed interpreters at £400 a year not before 2 years, & if go home before the expiration of 4 years without leave, passage money out & £200 for teachers & books to be repayed on demand. Telegram that war has been declared agst. America (Northerners) by England, on account of the Federalists stopping our mail steamer & taking 2 Confederate Commissioners out of it, it is believed here to be a hoax about war, & that the Americans will apologise.

Jan. 28. Tues.

Snow continues; went over & got my letters, wch. were from father, mother, Agneta & P.S. fr. Arthur. I tried to get into the Malu & get some Indian ink, but could not, on account of the snow. Chinese have a stupid habit of standing still in the way when you want to pass them; I astonished one with a push that tumbled him over, & another ran agst. me & smashed his umbrella. Got a Dictionary from Middleton. Spent the evening with Veitch, talking till 12 o'clock.

Jan. 29. Wed.

Went with Veitch to see his plants; called on Muirhead about a Japanese vocabulary, William's Canton Dictio. & got a gift from him of an old worm eaten copy of the 1st edition of Medhurst's ~~dictionary~~ sentences. Went &

bought a piece of ink. Went to Fogg's³⁹⁾ after a copy of Williams⁴⁰⁾ but had none; had a trucky lot of books. At a Canton shop was asked 1/2 dol. for 3 mother of pearl studs! Called on Jam. worked at Chinese in the afternoon, was introduced to Cap. Holland of the Marines, talked with V again till 11.

Jan. 30. Thurs.

Studied Hsin Ching Lu all the morning & afternoon. Received a visit fr. Middleton. Went out on the Bund at 5. met Bird & quitted him rather suddenly to snowball Middleton, Jam. & Sturt. Snowballed a few Chinamen, one of whom remonstrated in the most perfect English. Received a visit from Jam. after dinner.

Jan. 31. Friday.

At breakfast, Holland asked me if I would like to accompany him & his mariners on a walk in search of the rebel out posts. Said yes, with much pleasure, & went with him to his wretched quarters topside⁴¹⁾ the post office. Set out a little after 10; walked down the Malu, round the racecourse, along paths of hard downtrodden now up to the stone Bridge; which consists of three stone piles in the river, the [?]⁴²⁾ connected by [—]⁴³⁾ wooden drawbridges; there is a goodsized village at this point. After marching an hour & a half we came to a pretty village. Situated in the midst of bamboo groves, & with a creek running through it, called Wood-lands. Another hour brought us to a town which had been burnt by the rebels; the houses seemed at first quite deserted, & were filled with snow, but as we penetrated further we found people repairing damages, & at the centre, where were two stone bridges over 2 creeks joining, we saw plenty of Chinese. Here the men had something to drink & I tried to make out the name of the place but cld. not; so that it is at present a mystery. (Wongdoo).⁴⁴⁾ Coming back we noticed a joss-house & defended by a rampart & stakes. We lost our way for some time till put into it by a Chinese man; recrossed the Soochow creek by a ferry. Got hold of another Chinaman who put us into the road to Shanghai; at last we came to another village & here I got up to Holland, having left Sturt miles behind. As

we came back the depth of snow we floundered through was something awful; at diff: parts of the marsh the snow was melted & was beastly muddy, but ~~some~~ coming back thro' Soochow Bridge was the worst. We arrived back at the quarters at 4・10, I with a hungry belly. The glare from the snow was so strong that it scorched my face & made my eyes bloodshot.

Feb. 1. Saturday.

My eyes very sore this morning, & so had to study Chinese in giglamps. Saw Bird. Did not go out till 9 P.M. when I just crossed over to the Post office to see if there were any letters, but found the report of the Mail⁴⁵⁾ having come in to be all a hoax; some vessel had arrived with letters for a private house, carrying report of Prince Albert's death.⁴⁶⁾

Feb. 2. Sun.

Began reading Cumming's "Redemption draweth nigh"⁴⁷⁾ which Veitch lent me. Did not go to church, &c. Middleton coming in, persuaded me to go & skate; wch. I did, not without qualms of conscience. Query, is it right to skate on Sunday? Let wiser heads answer that; it requires some thinking to answer it. Borrowed skates of Reynolds the Engineer. In the evening, went to the American Church with Veitch & Rice,⁴⁸⁾ of the Coronandel.⁴⁹⁾ A Russian preached;⁵⁰⁾ he read the prayers very badly & did not sermonize well either. Afterwards came back to supper in my room. Stopped up till 12 talking. Amongst other things discussed whether it was of any use my learning Chinese in order to become a Japanese interpreter. Unanimously agreed in the negative. As Veitch says, it is like a man learning French in order to learn Italian, because he who knows the first will find the other easier than if he knew no French; but it is certain that he will never overtake one who learns Italian at once. When Alcock goes I must try & get Winchester to let me go over to Japan.

Feb. 3. Monday.

called on F.R.Gamwell & heard from him t[ha]t the mail had arrived the day before; I saw the newspaper which was full of the news about the Trent & Cap.

Wicks. From there went out to call on old Muirhead about a Japanese vocabulary & Williams' Canton Dictionary. He promised me copies if possible. Walked down the settlement to buy pens; saw some Chinese exhibiting pictures; & quantities of dice, dominoes & toys being sold. Went into the city & bought a bamboo 50 cents. The shopman had plenty of carved bamboos vases. They had been evidently playing at dominoes & dice; I sat down & made them write down the Chinese for each, & astonished their weak minds by telling them that 'English have all same that' & showed them how to play at wch. they were much delighted. Went about trying to get chessmen (棋子)⁵¹⁾ but they either could not twig, or else had none; I saw also some men playing a game of cards, with long strips of pasteboard, 3 1/2 in. by 3/4, which were differently marked. Plenty of exhibitions of pictures were about. The cold was so great that the juice of an orange I bought was quite frozen; lunched on earthnuts & cumquats. Came home through the suburb; there buying the fignuts I gave some cash to a youngster, and another immediately 'chinchined' for some; but no! Went into a Joss house, where a lot of Chinese were playing & singing, Joss himself was not there, but a plentiful meal of fruits & nuts was set out for him. Called at the Consulate & found that Jones had a draft for me to copy; refused to take it, but it was sent after me. Dined on board the Coromandel; Rice lent me Commodore Perry's 'Expedition to China & Japan'.⁵²⁾ Drank my first glass of whiskey & water. Awfully cold coming home.

Feb. 4. Tues.

Got my letters from P.O. from Father, Mother & Sam.⁵³⁾ Told Middleton that I am without paper to copy that dispatch on. I am certainly not going to use my own for Consular Service. Finished letter to Joe Taylor, wrote to Governor & partly to the old lady. Went with Veitch on board the Coromandel, Imperieuse & Lanrick. Was much surprised to see the immense field of drift ice between the ships & Pootung; the current carried it along at an immense rate. Introduced to the lieut. 1st Engin: Ad. secret: doctor:

commander⁵⁴⁾ of the Imperieuse. Went on the ice with Veitch: had a slide; saw Lenny, Gamwell & Maud.⁵⁵⁾

Feb. 5. Wed.

Went to Lenny to bother him for his skates; saw Fry,⁵⁶⁾ who is in the same house with young Winstanley.⁵⁷⁾ Found the ice to be very bad, & so returned before tiffin. Returned the skates after tiffin & went with Veitch to the silkshop on the Yan King Pang Creek, where I invested \$10 in a silk dress for the old lady & gauzes for the girls. Afterwards played Billiards with Veitch at Michie's, & saw Dallas,⁵⁸⁾ Turner,⁵⁹⁾ Gordon, King⁶⁰⁾ & Smith.⁶¹⁾ Dined there & more billiards, came home at 12 o'clock; it was freezing very hard & there was a thick fog just above the ground. In consequence a hard frost.

Feb. 6. Thursday.

Finished my letters home, and after tiffin went to the consulate where I electrified Jones by saying I had not begun my despatch; however, he sent over for it, and I commenced & nearly finished it. Saw Cap. Bradshaw⁶²⁾ at Markham's where I went with Middleton to have a cup of tea. He, Sturt, Broster, Jamieson & Dr. Boone⁶³⁾ dined here & came into my room afterwards. I was glad when they hooked it & left me with Rice & Veitch. Rice was obliged to put up in my room as he cld. not get a boat.

Feb. 7.

Finished my despatch; called on Jardine's schroff⁶⁴⁾ about a boy; will send him in a day or two. The roads were awfully muddy; went to Muirhead's to ask him about Thom's Chinese Speaker & he promised a copy of William's Canton Dictionary. T.C.S. he could not get; asked also to get me a teacher, & he will get me one in the course of next week; went to Clifton's⁶⁵⁾ the auctioneer with the intent of telling him to sell my photographic apparatus, but as an auction was proceeding I did nought. Made an attempt to go down from the Yang Pang to Astor House, & when I had got considerably more than halfway was obliged to turn back & land at Heard's⁶⁶⁾ jetty. Went to the Consulate to borrow Middleton's T.C.S. & was forced to sit down & work,

sending to Smith for my tiffin. Mail, per Ottawa closes today; despatched a sheet to Joe Taylor,⁶⁷⁾ & half a sheet to each of the Governor, Old Lady, Netty⁶⁸⁾ & Sam. Went down with Veitch to the Ottawa, which we had much trouble in reaching. Coming back the boatman went all round by the Pootung shore, insomuch that I thought I should never get home. Saw Maquire on [—]⁶⁹⁾ board, who was obliged to go home. The following is a letter I had to copy at the Consulate, & wch. I put in here verbatim et literatim.

157 Doig's Land
Scouring Buw, Dundee.
11th Nov. 1861.

To the British Counsel
Dear Sir

Having got my husband half pay stoped in consequence of his Dismissal from his Ship the Elizabeth of Dundee commanded by Captain Samson now You would favour me very much if You could give me any information regarding my Husband whos name is James Mawer discharged from the above named Ship and having got no word from him in any way if You would be as good as let me know if he joined any other Ship in Shanghai an answer to the above at Your earliest convenience will much oblidge me.

Yours Respectfully
Mrs. Mawer

P. S. he was discharged in July and was Steward of the said ship and by trade a confectioner.

To the British Counsel
Shanghai China
True copy. Ernest M Satow.

Feb. 8. Sat.

Teacher came to me this morning; found it very difficult to get on with him; called on Middleton & borrowed Thom's Chinese Speaker.

Feb. 9. Sun.

Spent the day with Middleton, loafing about before tiffin, treading after tiffin. In consequence of the muddy state of the streets did not go to any place of worship.

Mon. Feb. 10.

Got Mid[dleton]. to examine Ho, my teacher, & he said the old fellow was a muff, but advised me to keep him; saw Green at tiffin. Did some work at the consulate, & called on Rice; brought him back to dinner, played bowls & billiards with him & M. lost 1 game bowls, 2 billiards to 1 billiards.

Tues. Feb. 11.

Made a contract with Middleton to work an hour in the office every day on condition that he does what I want in Chinese in the even[ing]. I think the officework will benefit me more than the other. Began to read Devereux. borrowed fifty taels of Jones, & paid my bill to Smith of \$22.75 from 15-31 Jan[uary].

Feb. 12. Wed.

After tiffin walked up to the Yangkingpang & gave orders to F.A. Clifton⁷⁰⁾ to sell my photographic apparatus &c, & I sent them up by two coolies, called on Jamieson & arranged with his teacher to come to me instead of my own, whom I shall tip & give permission to stop away for the next two years at least. Men lent \$3 to Mid. Saw Holland⁷¹⁾ who said he was going to roop up the rebels at Plover Point tomorrow.

Feb. 13.

Called on Medhurst & asked him what I ought to be doing, & to my great delight, of course, informed me that my last month's work was entirely useless, & that I must begin Confucius directly. So I called on Muirhead for a copy & waited so long for the old boy that Mrs. M. was obliged to ask me to stay to ~~dinner~~ tea. At tea I was introduced to Roberts,⁷²⁾ the former instructor of Tai-ping-Hwang, as he says. When I entered the room from behind him I thought I saw a Chinaman. He had on a blue cotton cloak, with the hood over his head & there was a yellow silk handkerchief stuffed in the breast; a pair of horn spectacles with round glass sat on the bridge of his small sharp nose; he must be a good deal over fifty, to judge from his gray beard. He did not open his lips except to ask for what he wanted in the way of food, so that I had no opportunity of hearing him recount any adventures. After tea there was a meeting, which was attended by two serious artillerymen, Muirhead & wife, Roberts & Cox,⁷³⁾ a missionary from Canton. The proceedings, to use a threadbare phrase, opened with praise, viz. a hymn of the New Congregational Hymnbook, & of which old Roberts set the tune; it

was one of his own composition, made up as he went on, and delivered in a shaky sort of voice, it is impossible to describe the confusion of sounds caused by the congregation attempting to follow this caterwauling of the old driveller; as for myself I could not [—]⁷⁴⁾ join in, & should have burst out into a horselaugh, if the eye of Mrs. M. had not been upon me. I hope my demeanour impressed her with a good idea of my bringing up. This entertaining piece was followed by a most eloquent prayer from the senior of the serious artillerymen, of which the chief points seemed to be a great desire to make an impression, evinced by the frequent repetitions, & a frantic idea of putting the aspirates, which resulted in their being inserted where they should have been ignored & being dropped where the pronounciation of them was necessary to the sense. Cox also made a lame affair of his prayer, but old Muirhead made a pretty good Sermon. I shall attend regularly at his chapel when it is finished if it turns out to be a well arranged service. But I could not stand any more of old Roberts' setting the tunes. Mrs. Muirhead comes from Islington and said she knew people at Clapton,⁷⁵⁾ but I believe she must have been drunk; I know she so muddled me with talking about the Hanbury's, that I stated that Hafford Allen was a partner in the wholesale drug business with Daniel Bell Hanbury, which must be a pure invention of my own, as I never heard of any such thing.

Feb. 14. Fri.

Dismissed my old teacher under the impression that I did not like his writing; gave him \$3 for 5 days work, & took Ying, Jamieson's teacher instead, who will suit me better.

Feb. 15. Sat.

The Pearl⁷⁶⁾ arrived night before with Gen. Sir J Michell with 1 company of 99th foot from Hong Kong. Saw the old fellow making himself very cheap to the women. Mounted volunteers firing blank cartridge on the Bund. Bought a reading lamp for \$3; played billiards in a most wretched manner with Middleton in the evening.

Sun. 16. Feb.

Jones & Jamieson actually visited me, & I received an invitation to tiffin from J; from whom I borrowed Ellis' Hong Kong to Manila⁷⁷⁾ in /56 wch. I read through & found true to the life; he discredits what Veitch told me of the Manilamen on the River Pasig & Lago de Bay sitting on eggs to hatch them, & does not mention that they break the shells & eat the contents when they are just ready to emerge by their own unaided power. Met Gilmour,⁷⁸⁾ a Customhouse Assistant at Jones, a pleasant handsome fellow, whom we accompanied afterwards to the residence of the C.H. Clerks,⁷⁹⁾ to take a view of the city & surrounding country from the lookout, wch. is the highest in Shanghai. No rebels were visible; I was greatly surprised at the extent of the settlement, and feel convinced that if it grows even at no greater rate than it has hitherto done, it will soon rival in importance & extent any other colonial possession of Gt. Britain. It must eventually become ours; I hear that Medhurst has already asked Bruce's⁸⁰⁾ authority to turn the Taotai out, & to take the city under European if not English only, protection. Saw Green, & another D.A.C.G. named Hayter,⁸¹⁾ whose nose was pink with a bloodred lip; lighthaired & awfully padded. Altho' I had promised old Muirhead, half, to go to his meeting, I deferred the opportunity till his chapel is opened. Which is the II Sunday I have omitted D. worship.

Feb 17. Mon.

Called on Medhurst at 2 P.M. as he had desired; but before we could enter on the subject of debate Alabaster entered fresh from the expedition to Plover's Point. It appears that they disembarked all the force & were marching up, when two men came down to meet there & said that the pirates or Taipings, as they turned out to be, were willing to give up the Junk, Cargo & Men, but desired that the English would not enter the place. That had no effect, & the troops marched in, & turning the Chinamen out, took possession of their quarters. All the cargo of Fletchers⁸²⁾ junk except 100 barrels of tobacco, the junk & men were recovered, & the crew of two of Dent & Co.'s⁸³⁾ junk were

liberated from the confinement in which they had been placed by the pirates. Five junks belonging to the enemy were burnt, & also their property except what was lootable; the houses were spared as they belonged to the villagers. Three guns were discovered, & sunk in the middle of the Yangtze, but their arms were not taken from them. Among other things 200 cases of fine rifle gunpowder were destroyed. All this was effected without bloodshed, tho' the Taipings, in no. abt 300, seemed rather inclined for a bush with our troops & grumbled at their leaders for not permitting it. The Coromandel, Bouncer⁸⁴⁾ & Ringdove⁸⁵⁾ were employed on this expedition. When the Baster had left, Medhurst informed me that as Jamieson had not appeared I might come again tomorrow, & directed him to let me know his presence was desired. I asked if books & teachers were allowed, and he told me he did not know. I then went to F.A. Clifton, & heard sad news of my photographic apparatus; I unpacked the camera, & found that several bottles had smashed inside, & made a filthy mess; told them to sell for what it would fetch. Passed thro' the French settlement into the city, visiting on my way a curiosity shop, where the owner seemed afraid of my bothering with something; for when I went behind the counter he stood in the doorway. It is plain that the Chinese have no idea of picking one's pockets, for tho' I have given them plenty of opportunities they have never stolen any thing. I entered by the Porte Moutanbau, & after advancing a short distance soon turned to the left. The first shop that engaged my notice was a carved bamboo shop, into wch. I entered to get a walking stick, but could not agree as to price. The shopkeeper then showed me a lot of carved bamboo rulers, very pretty but not true, so I did not invest. The usual crowd collected round. Going out a pile of coarsely coloured printed pictures attracted my notice & when I asked the price, was told \$4 a dozen; I burst into a horselaugh & said 4 cash was nearer to the price.

The accompanying sketch⁸⁶⁾ is supposed to represent a Chinaman grinding corn; he jumps on one end of the thick lever & so raises the hammerhead, wch next falls, & by a succession of blows pounds the grain into flour. The man

was very much astonished at my trying to sketch his dodge.

I wandered entering a good many shops in search of ink, tho' I bought none, till I came to a place at wch. I had before observed a good many entering & passing out. I crowded in, & walked round. The first thing I saw was some Chinaman playing at teetotum for cash. Next I spotted a domino makers, & then crossed over & bought a set of Chinese Chessmen for 100 cash, after a good deal of misunderstanding. I could not get a chess-board. They are thick wooden draughters, with a character on each side, cut & painted. Of black there are 5 兵 ping: soldiers, 2 馬 ma, horses, 2 士 sze, scholars, 2 seang: to assist, 2 師 shwae, a leader, 2 炮 paon, a cannon, 2 車 chang, a chariot. Of white 5 卒 tsuh, soldiers, 2 馬 ma, 2 仕 she, tonetusa, magistrate, 2 象 she, a pig (seang, elephant), 1 將 tseang, to take, 2 砲 p'aon, a cannon, 2 車 chay, chariots. I shall make my teacher tell me the rules. I saw also some fortune telling, by means of rattling cash in a box, & divining characters & drawing lots, which seemed to be comprised in one lot. In addition to this there was an excited looking bloke reciting some stirring tale. When I came out I produced a pencil & wrote down the characters over the inner & outer portals; they are respectively 大正明光 and 隅海障保. I am as yet in perfect darkness as to the collective meaning of symbols, or to the uses & character of the place. The last shop I went into was a silk shop, where I saw men winding silk on to reels from skins; I also penetrated the inner shop, without asking leave, & saw them wearing ribbons, but the place was small. I finished up by a walk along the ramparts, to the Porte Moutanbau from the next one south of it. Before passing out of the city I mounted the lookout, & had a pretty good view of the river, shipping & houses. My attention was especially called to the French Cathedral, in the city, where French priests in Chinese costume go to perform service, & real Chinamen go to lie on the mats & sleep. I came along the Bund just in time to see the last of the review & to meet Lenny, with whom I took a turn.

"They raised up a fund,

“To build up a bund,

“For poor devils to walk at Shanghai”, Al. Smith.

Received invitation to dine at Siemssen & Co's on Wednesday next, but too sleepy to answer it tonight.

Feb. 18. Tues.

Ordered dumbbells to be made 9 lb. each, bought a Chinese compass, & some apples, 4 for 25 c. wch. said apples turned out rotten. Rice came in in[sic] the evening & invited me to dine on board on Thursday.

Feb. 19. Wed.

Dined at Siemssen's. Played a game of chess with Ying; of course he beat me. All Germans at Siemssen's, but got on very well, as all could speak English. Got home at 11.15 & finished “Up among the Pandits”. Consul wants me to write & copy letters; if it turns out that I am to stop here for 2 yrs, I will write home to Earl Russell⁸⁷⁾ & kick up a row, but it is not worth while to do it, if I have to go up to Peking soon.

Feb. 20. Thursday.

A party of marines & bluejackets went off in the Coromandel & Reynard⁸⁸⁾ to act in conjunction with Col. Ward's Chinese against the Rebels, whom they defeated with great slaughter & a loss of about 10 men to themselves; the French also took a part in the fight. The village where the rebels were was burnt to the ground.

Fri. Feb. 21.

The expedition returned this afternoon, bringing with it about 30 長毛, chang maon, as the Taipings are called on acct. of their long hair; I saw them on the Bund guarded by one of Ward's men, with their pigtails tied two & two. They were going into the city to have their heads taken off, I suppose. Alabaster captured one to make a boy of, but he was only a villager.

Sat. Feb. 22.

News has come that we are to go up to Peking as soon as possible, perhaps by the next mail. Called on F.A.Clifton, who informed me that my

photographic apparatus went for dols 51. Paid Muirhead for the first volume of Legge, & got a promise of a Medhurst's Chinese Dictionary. Was very seedy all day from the combined effects of a cold and two aperient pills I took the night before. Called on Rice & invited him on shore to play billiards, but he came not; why, I don't know. He asked me to dine on Sunday, as it will be his last day on board, as he is superseded to go home. I must not forget to send those silks by him.

Feb. 23. Sun.

Took a walk with Mid: to racecourse & came across the most awful stinks I ever smelt. The ditch & rampart seemed to be getting pretty well. Very cold wind was blowing & I caught cold in my face. Rice came in the afternoon & told me that he had already moved on board the frigate, so that his invitation to dine was of no good.

24-25-26.

Confined to my room with faceache. Ying has not made his appearance since Thursday last.

27 Thurs.

As there is a warm wind I ventured out. Went to Clifton's & received 48 taels as the net proceeds of my photographic apparatus. Called on Muirhead, who promised me for certain a copy of Medhurst's dictionary. Wrote to P & O Agent to see if any box had arrived for me. "Nothing," was the answer. Repaid Jones the taels he lent me, losing 25. c by difference of exchange, & not asking him for change out of a dollar for 89 c. Ying came not. Faceache not abated. My face, right cheek, so swelled that I can't see the tip of my nose, & I look just like a Chinaman on one side of my face.

28. - ~~29~~ Mar. 1.

Played Billiards with Middleton, & beat him at last. Saturday called on Rice on the Imperieuse & he showed me all over the ship; went up the screw alley, & saw the machinery for drawing back the shaft, so as to allow of the screw's being drawn out of the water. In the afternoon the expedition returned from

Minhong 13⁸⁹ miles up the river, leaving the Admiral & staff up there in the Coromandel. It seems that 350 bluejackets & marines 35 R.A.; 300 French sailors & 700 of Ward's men landed on Fri. night & encamped on the bank of the river, when some shots were fired at them by a reconnoitering party of rebels fr. Minhong. At 7 • 45 AM they arrived before the place, which was fortified with two ditches & a wall. The enemy numbered 5000 & made a good show of resistance until silenced by the 12 lb ~~der~~ fieldpiece & Bradshaws six guns. Then an assault was made & the Marines got in at one gate while Ward's men did the same at another. About 1400 rebels were killed, the Chinese cutting off the heads of all the wounded. One Fr. killed & several wounded, 5 Eng. wounded, two of wch. will not live, & a good lot of Ward's men killed & wounded. The enemy had rifles & rockets, & fought very well hand to hand.

Mar. 2. Sun.

As Middleton & I were walking in the Malu, we met a Chinese female, surrounded by a crowd of coolies, who was quite drunk or mad; her hair was loose & she had taken off two pieces of her upper clothing, wch. she dipped in the gutter & then struck at the Chinese around when they approached too near. Called on Jones & borrowed C.P. Hodgson's book on Japan, which is an apparently foolish, badly written piece of tract.

Mar. 3. Mon.

Drew \$150 of pay. Walked into the city & right to the other side of it, where the French are building a trench & rampart, like ours. Went into a good lot of shops, & at one of them bought the first half of the Confucian Analects 論語 for 100 cash. Saw some picture books which I resolved to return for next day; was out altogether 3 1/4 hrs. In the evening went on board the Imperieuse to hear the band play & to see Rice; the band was deafening & did not play well; at least I thought not.

Mar. 4.

Went into the city again & gave \$1 for some illustrated Chinese Books, wch.

books I gave to Rice in the evening for 50. c. They were prints of scenery, of the parts of the body, & of all sorts of birds, plants, fish & beasts. Rice dined with me, & afterwards we played billiards to my detriment.

Mar. 5. Wednesday.

dined with J.S. Robinson of Lindsay & Co's whom I had called on the day before. Saw Henderson,⁹⁰⁾ L & Co's agent at Tiensin, & B. Dallas, who greatly to my disgust went to sleep during dessert. In the billiardroom met Smith[,] CH Dallas⁹¹⁾ & Dulcken⁹²⁾; also Bosanquet⁹³⁾ of the Flamer. Smith proposed a Spanish game of pool with skittles, at which he contrived to stake the pool, every time I lost half a dollar, wch. I could not pay & would not borrow & there it rests, got home to bed at 12 • 30.

Mar. 6. Thurs.

Received letters from Father & Fred. Berndes & a joint one from Arthur & Agneta. Was much surprised to get a letter from Frizzle, & must write to tell him all about China when I get to Peking. Did some work at the office & wrote my letters for the mail. Consul told me that I shall go up by the next but one mail to the North. Played billiards with Mid. & lost. Rice & Parker⁹⁴⁾ of the Coromandel go home by this mail, lucky fellows.

Mar. 7. Friday.

Walked with M. to the bookshops in the city & got two picturebooks, the one I got was the illustrations to a herbal; of course it was of no use to buy the rest in my present state of knowledge of Chinese. Some very good ones were shown us, but we could not come up to their prices. At one place had a struggle with the shopkeeper, and I fancy he imparted a louse to me, for I caught one in the evening; shall take precious good care not to get too near a Chinese again.

Saturday. 8.

Attended a sale in the morning & got most awfully tired & besides that caught a cold & headache. Called on old Muirhead & got his Medhurst's dictionary out of him for \$10, one vol newly rebound; it certainly was very kind of him.

Dined at Dallas's where I saw Waitland,⁹⁵⁾ that drawling, thro'-the-nose-lacking snob, & a man from Fuchan who seemed half drunk, but certainly told some good tales. Of course the conversation became smutty.

Sunday 9. Mon. 10, Tues. 11.

Bad cold, & therefore indoors nearly all day; had intended to go & hear old Muirhead preach, but when I was ready found it too late.

Wed. 12.

Finished my vocabulary today & got one from the Cons: office by a man named Pillary. Ying seems to have given up teaching entirely. I never saw such a set of blokes as are now collected at Smith's:⁹⁶⁾ Nimmo, blind of one eye & lame; 2 Yankee captains; the engineer of the Paonshan, with a purple nose & face & a red streak down his forehead correspondingly to his nose; his hair is never tidy & his head is tied up in a black handkerchief. Then a scowler, who sits back from the table & leers at everybody & his left neighbour in partic[ular] who is C.H. Smith, a grey haired, grey whiskered fat chopped glutton; he does not like to see his boy wait on others, & always helps himself to the fruit & gives away the crust. Then 2 merchant skippers with black beards who always drink 1 bottle of sherry & one of beer for dinner & then affectionately quarrell who shall put his name down. Last night came a skipper who praised the justice & skill of Markham, & insulted F.T. Meddows for fining him \$50, \$5 & \$200 in 3 days; I thought he must have a regular scoundel to incur such a lot of fines in a short time; he acknowledged himself to be a perfect cure. Two lieutenants of the 99th. & a jockey & an ex-milliner's assistant make up the catalogue.

Sunday 16th.

went to hear old Muirhead preach & got to the chapel in the middle of the long prayer; he preached a good sermon, but I did not carry away much of it. Taking advantage of the door being opened while he was giving out the last hymn I slipped away, & so avoided speaking to him or his wife. Finished the Adelphi of Terence today, of which author I have read the Hecyra,

heantontimoroumenos, Enochous & Andeia since my arrival here. Began upon Virgil & read one book & a half of the Aeneid. I must read that through, then half a dozen plays of Plautus & afterwards Cicero & 2 Curtius. At Peking I can also begin a course of Greek, Homer, Sophocles & Aristophanes & what other authors I can pick up. Nor must I forget my German. For English reading I can take Sir W. Hamilton on Metaphysics after I have finished Lyell, & so I think to employ myself for a good long time.

Tues. 25.

Left Shanghai 6 a.m. in the Ringdove, & Captain Craigie, Lieuts. Liardet & Arundel, Master Haydon, 1st Eng. Shearman, Surg. Greaves of the Coromandel.

結び

サトウの生涯は、1843年(天保14年)から1929年(昭和4年)の間の約86年にわたっている。すでに述べたように、18歳のときに書いた「上海日記」は、生涯の日記の書き出しであり、全体からみれば極くわずかな部分にすぎない。「上海日記」に始まって、ながい生涯のあいだに、全部で40冊を越える日記ノートが残されている。日記を上海で書き始めた若いサトウが、レンソンの批判にあるように、将来に発展する自分の姿を予見していたとは思われないにしても、後日の私たちがサトウ日記を辿っていくとき、サトウには本能的な予見性、あるいは将来への夢、があったようにも受け取れるのである。目先の利益のみを追うバーネス・ダラスなど、上海に在住する冒険商人の若い仲間に加わりながらも、サトウの意思や内奥の魂は、汚染されそうにみえて、崩されてはいない。独学でギリシャ古典の教養を身につけようとする青年の姿のなかに、私たちは、本能的に予見されている後年の優れた外交官サトウを認めるべきであろう。

サトウの上海滞在は20歳前の最初の異国生活であり、そうであるだけに新鮮な驚きと混乱、期待感と深刻な失望とが錯綜する世界であった。その日この時の人生は混沌として、一歩先きが読めない。読めないけれども、不安な曖昧な中に、意思の決定が行われる。後日に本人か伝記作家が、そうした意思決定の道筋を、秩序だてて自叙伝や伝記に辿ってみせるのである。整然とした筋道は、多くのばあい、実際の人生行路であるかのようにとめられる。後年の或る到達時点のイメージに引き合わせる形で、意識的に、あるいは無意識的に、その際に取捨選択が行われている。サトウ日記と回想録との間に、「ズレ」が多少なりともあるとすれば、この取捨選択に起因する。あるイメージのために、切り捨てられるものが輩出するというわけである。

日記や書簡という私的な文書は、本来の性格からして、少なくとも執筆時点で、後年の自己像を予見できたり、後年のイメージに合わせる形で、記述内容の取捨選択を行うというわけのものでない。勿論、他人が見るかも知れない可能性を考えた私的文書が皆無でないにしてもである。それだけに、とくに日記の場合には、私的な関心事項として、他人から見れば些細で詰まらないと思える事柄を大事に記録するのである。

後年の私たちが、日記などの私的文書に関わるのは、例えばサトウ自身の回想録に自己神話化がないかどうか確かめるためである。また、新たな一つの神話とも言えるサトウの新イメージを形成する必要が出てきた場合であったりする。サトウ自身が書きとめながら

回想録で省略したものの中に、新たなイメージの根拠を探す必要が生じた場合といえる。そうした可能性をはらんだ資料として、無意味な事項の記録と見える日記は、読む人によってはトリビアリズムの意義ある宝庫と言えるであろう。

リング・ダラス事件で登場する加藤龍吉の遺族、加藤証氏は、龍吉の遺産を受け継ぐかのように、国学の研究をされておられるが、杵築市の郷土史にも詳しく、土居寛申氏の生存中に杵築史談会に加わっている。昭和37年6月に発行された同史談会の機関誌13号には、加藤氏による寄稿があり、「サトウの姫島記事」(pp.27-34)と題された次のような内容の紹介がある。

「姫島は、戦後観光ブームの波に乗って、世人に注目されるようになったが、旧幕時代は杵築藩に属し、元治元年(1864)の長州と英・仏・米・蘭の四か国連合艦隊との下関戦争の際は、連合艦隊の根拠地となった島である」。

「若き日の伊(藤博文)・井上(馨)二公を姫島に向かって護送した英艦に乗っていたのが、イギリス青年外交官アーネスト・サトウであった。サトウは幕末から明治維新にかけての革命期の日本に長く駐在し、日本の運命を左右した多くの事件に直接関係した人で、その体験談を書いたのが、『日本における外交官』である。この本は、終戦前はわが国では禁書として扱われてきた由であるが、

「文章は平易で解説の要もなく、豊前の杵築としてあるのを豊後の杵築に改める以外に訂正すべき箇所も見当たらないようである。この記事に対して、当時の杵築藩の對外態度を物語る藩の記録とか、民間人の日記類が現れたら、更により研究が出来るだろうと思われるのである」。

サトウの「上海日記」のなかの雑多な記録から、おそらく、上記加藤氏であれば、バーネス・ダラスやC.H.ダラスの記述に、何よりも関心を引かれたであろう。偶然の連鎖にはちがいない。しかし、マイナーな事象の連鎖を記録するはずの日記に、後日に読む人によっては、マイナーでなくなる記載事項を発見するよい具体例であると思われる。

注

まえがき

- 1) 天沢退二郎著『宮澤賢治の彼方へ』(思潮社, 1977)
- 2) 入沢康夫・天沢退二郎・宮澤清六共編『校本・宮澤賢治全集』(筑摩書房, 1973~77,

Vols 14)

- 3) 最近になってやっと、待望の研究成果が刊行されはじめた。米国からはカール・ベクソンの伝記、さらに英国では、イアン・フレッチャーとお弟子のジョン・ストークスの手で中心的に進められてきた文献調査の結果が、近々刊行されることになった。しかし、ここ10数年間の成果を見ることなく、イアン・フレッチャーが他界されたことで、シモンズ研究の巨星が消えたような寂しさの中での出版となった。
参照 Karl Beckson: *Arthur Symons, Life*, Oxford Univ. Press, 1987.
- 4) Sir Ernest Satow: *A Diplomat in Japan*, J.B. Lippincott Co., London, 1921.
Sir Ernest Satow: *A Diplomat in Japan*, Charles Tuttle Co., Tokyo, 1983.
坂田精一訳『一外交官が見た明治維新』上下二巻(岩波文庫, 1960年)。
- 5) Ca 4/04.1/1, Satow Papers (in microfilms), Yokohama Archives of History.

第一章

- 1) Sir Ernest Satow: *A Diplomat in Japan*, J.B. Lippincott Co., *ibid.*, p.7.
- 2) 初回は「英文文書館のたのしみ」と見出しのある「序章①」で、朝日新聞夕刊、昭和51年10月12日(火)の5面に掲載された。
- 3) Gordon Daniels: "Introduction," *A Diplomat in Japan*, Oxford Univ. Press, 1968, pp.v-xiii.
- 4) Gordon Dainels: *Sir Harry Parkes, British Representative in Japan, 1864-1883*, Oxford, 1967.
- 5) *Ibid.*, Daniels, "Introduction", p.viii.
- 6) *Ibid.*, p.v.
- 7) *Ibid.*
- 8) Bernard M. Allen: *The Rt. Hon. Sir Ernest Satow, G.C.M.G.*, Kegan Paul, London, 1933, pp.152.
- 9) 朝日新聞夕刊、昭和51年12月8日(水), 7面。
- 10) ダニエルズによれば、若い頃のサトウの側面をよく捉えている伝記としては、前出のアレンの公伝よりも、レンセンの書いたものが参考になると述べている。
George Alexander Lenson, edited: *Korea and Manchuria between Russia and Japan, 1895-1904*, the Observations of Sir Ernest Satow, British Plenipotentiary to Japan (1895-1900) and China (1900-1906). Selected and Edited with a Historical Introduction. Sophia University, Tokyo, 1966.
"Raised in a strict Lutheran, Orthodox Nonconformist way, Satow received a broader outlook at University College, London." See Lensen's "Introduction", *ibid.*, pp.1-39.
- 11) Sir Edmund Gosse: *Father and Son*, Penguin Books, 1973.
- 12) 50回(51年12月22日・5面), 51回(同月23日・5面), 52回(同月24日・7面)

第二章

- 1) 以下に訳出する日記については、第三章の英文テキストに付した注で説明するので、ここでは注を省くことにする。
- 2) Harold S. Williams: *Tales of the Foreign Settlements in Japan*, Charles Tuttle Co., Tokyo, 1958. p.18.

- 3) 後年のサトウのイメージは、アレンの伝記に引用されている次の二つの引用文に、現されていると思われる。最初のもは、1895年7月16日に英国公使として来日したときに、ベルギー大使夫人の目に映った印象である。次の引用文は、死後に友人の司祭が述べた言葉であり、obituaryとして印象をまとめている。
- “Sir Ernest Satow, the new British Minister, arrived here. He is a tall, slight, rather care worn man, with an intellectual face and the stoop of the student. He seems most agreeable and interesting.” (Allen, *ibid.*, pp.113-4). “He was a scholar of rare distinction, not in Japanese only but in Latin, Italian and Spanish, and his knowledge of English literature was wide and discriminating. He was also a deeply religious man, with a great understanding of the principles of the religious life.” (*ibid.*, p.143).
- 4) Barnes Dallas: auctioneer (secretary to British Chamber of Commerce, Shanghai).
- 日本近世史に生麦事件で名前を残したリチャードソン(Charles Lenox Richardson)とは上海で親友であったことが、英国公文書館に保管されている生麦事件賠償金関係の書類の中に、ダラス自身の証言が含まれているから分かる。1862年にはバーネス・ダラスの商社に次の三人が働いている。C. H. Dallas, A. C. Dutcken, S. Day.
- 5) 参照:「三九 南校教師ヲ刃傷シタル本藩人肥後壮七外二名ヲ処刑ス」『鹿児島県史料・忠義公史料・第七巻』(鹿児島県, 昭和54年), pp.43-4。
- 6) 参照:「ダラス, リング事件の当時」『高橋是清自伝』上巻(中公文庫, 昭和62年), pp.83-8。
- 7) 松野良寅編著『城下町の異人さん』(米沢市・遠藤書店, 昭和62年), p.133。
- 8) 前掲書参照。
- 9) 加藤証著「明治維新の志士 加藤竜吉」『郷土史 杵築』第71号(杵築郷土史研究会, 昭和61年11月20日発行), pp.23-60。
- 10) 前掲書, pp.45-6。

第三章

- 1) 括弧〔 〕のなかの記載事項は、筆者の挿入する注であり、サトウ本人が括弧書きをしているものを括弧()で示して以下区別する。
- 2) 時間や数字の書き方にサトウの特徴が見られる。この場合の8のように、数字のあとにピリオドを打ち、午前はam.としてaのあとにほとんどピリオドを入れてないのに、午後はp.m.とする、あるいは10時30などのように数字がつづくときには、10・30と中黒の点で示しているのも特徴である。数字のあとにかならずピリオドを打っていることなどは、サトウの几帳面な性格を窺わせるものである。
- 3) Tuesdayのように斜線が入っている単語や文字は、以下、サトウ自身による削除を示す。なお、削除されたもとの文字が判読不可能のときには、そのつど[—]と筆者注で示すことにする。
- 4) Lindsay & Co.: British hong.
- W. S. リンゼイが設立した英国系商会で、中国語社名を「廣隆」(Kwang-loong)と言って、上海では活発な商いをしていた有力商社である。後出のミッチイーが上海代表をつとめている。ここでも明らかなように、外交官など英国政府関係者がみずから進んで商社の世話を受けようとしているなど、外交官と商社との緊密な関係に注目しておきたい。この点は、長崎のグラバーや横浜のジャーデン・マセソン商会の政治的役割を理解するうえで、上海が一つのモデルになるので、重要な点であると思う。
- 5) Walter Henry Medhurst: British Acting Consul, Shanghai.

同名の父親(1796-1857)は、ロンドン・ミッション派遣の宣教師としてながく中国に滞在した。1816年九月にジャワ島に渡り、上海開港直後の1843年秋いらい、こんどは、上海を中心にキリスト教の宣教にあたった。俗に『メッドハーストの中国』(Medhurst's China)とよばれる書物(*China, Its State and Prospects*, London, 1838)を著したばかりでなく、日本語研究の草分けと言われる『英和・和英語彙集』を1830年にバタビアで出版している。こうした中国通・日本通の父親のもとで育成したメッドハースト(日記のこの時点で上海の英国領事代理)は、ハリー・パークスに並ぶ中国通の英国外交官として評判がたかく、漢字や日本語にも詳しいので、日本語通訳見習いの北京滞在をオルコックに勧めた当人らしい。英国へ帰国して1858年4月20日にジュリアンナとの結婚式をあげ、新婦をともない上海にもどるときには、同年5月20日のザンプトン発蒸気船でオルコックと一緒にいる。

- 6) C. Treasure Jones: 1st Assistant, British Consulate, Shanghai.

以下、公使館員や商社員などの勤務先・地位については、この場合のように、日記が書かれた時点の1862年のものを示すようにする。

- 7) Sir Rutherford Alcock: British Consul-general, Yeddo.

- 8) North の略。

- 9) J. T. Middleton: 3rd Assistant, British Consulate, Shanghai.

- 10) T. Markham: Vice-consul, British Consulate, Shanghai.

- 11) Charles A. Winchester のことを言うのかどうか不明。

- 12) 上海には何人かレイノルズという家名の英国商人が在住しているので、このファニーはそうした一族の娘であり、ジョーンズ夫人と姉妹関係にあって、容貌が瓜二つという意味にもとれる。

- 13) R. A. Jamieson: Japanese student interpreter.

参照: Sir Ernest Satow's *A Diplomat in Japan*, J.B. Lippincott, London 21. p.18.

また、『サトウ日記』(Ernest Satow Diary, August 24, 1862)には、次のような説明があり、ジェームソンは、サトウの同僚として上海と北京で漢字の勉強にあたったが、結局、日本語通訳見習いの仕事を放棄したことが分かる。

"At Shanghai Jamieson concluded an arrangement with James Whittall to set up a newspaper, of which the profits for the first three years should be W's, while Jamieson shld. receive \$1000 per annum. If it succeeded he was to receive the paper & conduct it for himself & Hallpike, after the expenses of W. had been entirely repaid. He is a lucky fellow, and will do well. I am rejoiced at his success for several reasons."

- 14) Astor House Hotel: Henry Smith, proprietor.

早くから米国租界に建てられた下宿屋のようなホテルで、ほかに適当なホテルや宿泊先がないので広く利用された。上海のみならず横浜にも同名のホテルが早くからできる、ニューヨークの有名ホテルの名前にちなんだものの、そこに宿泊する人間模様は雑多で、決して上品な客ばかりでなかったことは、後出の3月12日分の描写に詳しい。サトウは、経営者のスミスや同宿者のヴェイチなど、ホテルで知り合った色々な人と付き合っている。階級意識にしばられるあまりに、交際の範囲をせばめる従来の英国紳士のマナーとは違い、サトウは若いだけに雑種的な逞しさがあつた。

- 15) 詳細不明。

- 16) British man of war: screw frigate, 51 guns, 360 horse power, G.O. Wills Captain.

- 17) 詳細不明。

- 18) 人物の特定化はできないが、公使館の仲間であることからすれば、次の人物である可能性がた

かい。

Mathew Green: constable, British consulate, Nagasaki.

- 19) 詳細不明。
- 20) ここでは, chambersと読みたいところであるが, chalets でなく challetsと読めるスペルである。
- 21) Rev. William Muirhead: missionary, Shanghai.
- 22) 詳細不明。
- 23) 詳細不明。
- 24) 人物の特定化はできないが, 同じホテルに下宿する商社員であり, 次の人物である可能性がある。
J. S. Bird: G.H.Drew & Co., shipbuilder.
- 25) 削除されている単語は, bow のように読めそうであるが, 不確かである。
- 26) 上海での米国, 英国のプロテスタント系教会と宣教師館の建設は早かった。開港から間もない1845年に建設が始まり, メッドハースト, ロックハート, ミュアヘッドといった三人の宣教師を中心にして, 宣教活動に入っている。1846年には米国の聖公会系ミッションが小学校を創設し, 聖約翰大学の雛形になった。またカトリック教会も, 1849年11月21日にジェスイット派が竣工式を行っているし, そこには世界でも珍しい中国竹製のパイプ・オルガンが設置されて, 上海名物の一つになったと言われている。
(参照: 呉川義編『上海租界問題』正中書局, 台北市, 1981年)。
- 27) si?hs と, 不明な箇所の一文字分が加筆訂正されているので, 単語全体がなんであるか分からない。
?の箇所は, a o b k などに見えるが, インド傭兵の意味で sikhsと訂正しようとしたのかも知れない。
- 28) F. C. Sibbald: M.D., M.R.C.S.E., surgeon.
中国名で「兵房」という Shanghai Hospital and Dispensary の外科医で, 中国通であったから, サトウとしてはそこに下宿させてもらい, 中国語の勉強をしたかったのであろう。
- 29) T. Moncrieff: Moncrieff, Grove & Co., merchant.
- 30) Moncrieff が, Francis H. Groveと共同で経営する商会に, G. T. Lay という商社員がいる。こちらがおそらく, Lay のカナダ人の甥であろうか。というのも天津の英国領事館には中国語通訳見習いで, W. Layがおり, 中国語教師を紹介しているところからみて, ここでいう Layと同一人物の可能性があるためである。他方では, 彼らよりも一世代前の人物で, G. Tradescent Layがいる。C. W. Kingとの共著で, モリソン号の日本航海にもふれた日本文化論を, キリスト教の立場から二巻本で1839年に書いている。
- 31) 上海の絹商人。
- 32) ドイツ系の商社で, 中国名を「禪臣」と言った。
- 33) 後述のデント商会につとめるC. G. Lenny のことかも知れないが, 詳細不明。
- 34) 日記本文のなかのinternal evidence から判断するだけで, どのような人物であるか詳細不明であるが, ロンドンのチェルシーから来ている植木職人で, 日本へも渡航したらしく, 現在は, サトウと同じホテルに同宿していることが分かる。
- 35) 一語が削除されているが, 判読困難。
- 36) A. Michie. リンゼイ商会の上海代表。
- 37) 詳細不明。
- 38) H. P. Gordon: Lindsay & Co., clerk, Shanghai.
- 39) H. Fogg & Co.: shipchandlers, Shanghai.

1847年開店の上海では有名な雑貨店。

- 40) Samuel W. Williams: scientist.

1837年のモリソン号事件では、日本人漂流者「音吉」をとめない、宣教師ギュッツラフ等の一行に加わって、日本へ渡来した博物学者である。参照: 春名徹著『にっぽん音吉漂流記』(中公文庫, 1988年), 三浦綾子著『海嶺』(主婦の友社, 1989年)。

- 41) 最初に outside と書き, out にのみ斜線を引き, top を書き添えて訂正している。
- 42) 二つの単語につき, 上から加筆して訂正しているので, 判読が困難である。
- 43) 一語が削除されているが, 判読困難。
- 44) “地” の文章で使っているインクの色と明らかに違っているので, 後日にサトウが書き込みをしたものと思われる。
- 45) 本国からの書簡を運ぶ郵便船。
- 46) 1861年12月14日死去。
- 47) 詳細不明。
- 48) 軍艦コロマンデル号の乗組員であることのほかは, 詳細不明。
- 49) British man of war: paddle vessel, 150 horse power, Davidson (Lieut.-commanding).
- 50) 米国系教会とは, 米国聖公会 Board of Foreign Missions of the Protestant Episcopal Church, U.S.A. の教会をさすものを思われ, そこには, 次のようなロシア名の宣教師が一人いる。
Rev. J. J. Scherreschewsky.
- 51) サトウ自身が括弧をつけて, なかに漢字を書いている。以下同じように, テキスト中の漢字は, すべてサトウが書いているものの転写である。
- 52) Francis L. Hawks: *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy*, D. Appleton and Co., New York, 1856.
- 53) Samuel Augustus Mason Satow, born Oct. 29, 1847.
サトウの四歳下の弟。なお, ここでは, 父母のことを Father, Mother と言っているのであるが, ほかには Governor, the old lady とのヴィクトリア朝的な言い方もしている。
- 54) G. O. Willis: 既出。
- 55) 詳細不明。
- 56) Joseph Fry: Shaw Brothers & Co. (李百里), clerk, Shanghai.
- 57) A. Winstanley: Shaw Brothers & Co., ibid.
- 58) 参照: 第二章注 4)。
- 59) ターナー商会 (Turner & Co.) が上海に当時あるけれども, その経営者であろうか。また, 同商会には, E. C. Smith という商社員が勤めている。
- 60) 詳細不明。
- 61) サトウの下宿するアスター・ハウス・ホテルの経営者である可能性がたかい。
- 62) 詳細不明。
- 63) Rev. W. J. Boone: the Protestant Episcopal Church, U.S.A., missionary.
- 64) Jardine Matheson & Co.: British hong.

中国名を「拾和」(E-h) といい, 中国・日本における最強の英国系商社。同社の初代上海代表には, 珍しく親族でなく, ダラス (Alexander Grant Dallas) が選ばれた。彼は 1858 年 3 月 9 日に, バンクーバー島総督ジェームス・ダグラスの次女ジェインと結婚していて, このころには上海にいない。しかし, バーネス・ダラスやチャールス・ヘンリー・ダラスと何らかの血縁関

係にあると見てよいと思われる。

参照 Maurice Collins: *Foreign Mud*, Faber & Faber, London, 1946.

拙著『生麦事件—薩摩とイギリスの出会い』「上海の英国租界」(高城書房, 1987年)。

藤原恵洋著『上海』(講談社, 昭和63年)。

65) Clifton & Co.: S. Clifton, auctioner.

66) Augustus F. Heard & Co.: American hong, Shanghai.

米国系有力商社のラッセル商会で働いていたハードが, 1836年に独立して作った商社であるが, 活動の本拠地を香港でなく, 上海に置いたところが特異であった。生麦事件に登場するクラークは, 最初上海のハードに勤めてから横浜へ転勤になり, 事件に巻き込まれたわけである。英国人であったが, 米国系商社に勤務していたので, 事件発生当初には米国人とまちがえられた。

67) Joe Taylor: サトウの親友。

68) Netty: サトウの家族か。

69) 一単語が削除されているが, 判読困難。

70) 前出注65)のクリフトン商会では, クリフトン夫人が経営する呉服部もあったらしいが, ここでいうF. A.クリフトンとは息子のことなのか, 関係は不明である。

71) 詳細不明。

72) 英国領事館員かも知れないが, 詳細は不明である。

73) Rev. J. Cox: Wesleyan Methodist Mission Society, missionary, Canton.

74) 一語削除されているが, 判読困難。

75) Clapton, Northeast London.

クラブトンはサトウの故郷であり, また後出のAllenはサトウの親族である。

76) British man of war: screw corvette, 21 guns, 400 horse power, J. Borlase, captain.

77) Ellis: *Hong Kong to Manila*, 1856.

78) D. Gilmour: Imperial Maritime Customs (江南海関), assistant, Shanghai.

79) 詳細不明。

80) Sir F. Bruce: British Minister at Peking.

81) 詳細不明。

82) Fletcher & Co.: 呖禮查 (Fa-li-cha), hong, Shanghai.

83) Dent & Co.: 寶順, British hong, Shanghai.

ランセロットとジョンのデント兄弟が経営するデント商会は, 阿片・茶・絹などの貿易でえた莫大な利益を, 庭園など貴族的な趣味や贅沢な歓待におしみなく使うので, 「王侯商人」とまで言われた有力な商社である。

84) British man of war: gun-boat, 60 horse power, J.S. Creasy, commanding.

85) British man of war: screw sloop, 4 guns, 200 horse power. R. G. Craigie, commander.

See Sir Hugh Cortazzi's *Dr. Willis in Japan*, the Athlone Press, London, 1985, p.31: "Next day we buried a Commander named Craigie, much liked, from cholera. He was ill only a few hours. I dined with him...in Shanghai."

86) 実際に日記には, サトウの直筆ペン画が描かれている。

87) Earl Russell: British Foreign Minister.

88) British man of war: despatch vessel, 4 guns, 200 horse power, C. Rowley, commander.

89) 15と最初に書いてから, 5を3に訂正している。

90) J. H. Henderson: Lindsay & Co. 連治加 (Lin-chee-ka), clerk, Tiensin.

91) Charles Henry Dallas (1842-1894): Barnes Dallas & Co., clerk, Shanghai.

第二章のうち、リング・ダラス事件に関する説明を参照。

92) 参照: 第二章注 4)。

93) G.S.Bosanquet: Lieut.-commanding, H.M.S. Flamer, gun boat, 60 horse power.

94) 詳細不明。

95) 詳細不明。

96) アスター・ハウス・ホテル。経営者ヘンリー・スミスが本文中でいう the boyであるなら、C.H.Smithはその父親ということになる。